

親と子の豊かな器と食卓を感じる

『たのしいうつわ』のできるまで

— 大人が読み聞かせる乳幼児向けの「イラスト・写真集」 —

(社) 農協共済総合研究所
調査研究部 主席研究員

渡 辺 靖 仁

目次

- 1 はじめに：目的
 - 2 制作の背景
 - 3 制作者
 - 4 制作の過程で
 - 5 「イラスト・写真集」『たのしいうつわ』のサイズ
 - 6 おわりに
- 『たのしいうつわ』(冊子) イメージ (A4サイズ)

1 はじめに：目的

本稿では、器と楽しい食卓の意義を親が乳幼児向けにやさしく読み聞かせる「イラスト・写真集」『たのしいうつわ』を紹介する(本稿後段(p.110~121)に掲示)。この作品は、母子が楽しく器を使って食事をするための豊かさを感得するために制作された。内容は、陶磁器ができるまでとそれを用いた会食シーンを写真つきで解説したものである。それぞれのシーンで、この作品を制作した陶芸家・長井麦氏(「麦工房」代表)の編み出したユニークなキャラクターが楽しく無駄のないコメントを入れている。そして、(1)手作りのあたたかさ(2)自然のありがたさ(3)人と人が関わって生きていくことの大切さを親しみやすくかろやかに述べている。全頁美しく彩色されている器の物語であることか

ら、著者としては保存性を高めるため現代の「蒔絵」として漆張りに制作したいところであった。しかしいまやその職人も少なくなったし材料の入手が難しい。このため「蒔絵」をあきらめ、ここでは単に「イラスト・写真集」としている。

また、このように呼ぶもう一つの理由は、その多機能性にある。著者は、この「イラスト・写真集」の制作を長井代表に依頼する際に、「器の持つ食と人をはぐくむ力」について若い人や子供たちにどのように伝えるかを問うた。この問いに長井氏は大いにこたえた。むしろ長井代表にとってこの目的は常日頃追い求めているものであった。普段は陶器という3次元の世界によってこれを伝えている。今回は、イラスト・写真という平面の世界でこれを伝えようとする。いわば媒体の拡張が長井代表にとって主な課題であったのか

もしれない。その結果この『たのしいつわ』は、これを使う人の気持ちとアイデアによって「絵本」^(注1)・「紙芝居」・「器の福笑い」・「すごろく台紙」など、さまざまな取り扱いのできる可能性にあふれたものとなった。長井代表の思いも込められたゆえにこのように生まれ得たものなのであろう。

2 制作の背景

1) 器の記事の少なさ

食育基本法が2005年に施行されて以来、本稿であらためて紹介するまでもなく、いわゆる食育に向けた活動が全国でもさかんに取り組まれている。その活動は新聞でも多く取り上げられている^(注2)。しかし器に関しては、この法律が施行された2005年の萩・伊万里、翌2006年の多治見において地域特産の陶器を使う運動を紹介した3件の他は、それほど記事となっていない。器のニュースは少ないのである。

これはしかし器に対する関心がないということではないと考える。理由をふたつあげる。ひとつは、器を大事に使い躰けるのは家庭の日常だからである。日常的なことはニュースになり得ない。萩・多治見・伊万里の記事は、むしろ産業政策の要素を持っている。

しかし日常の食の乱れが認識されて食育基本法の制定にまで至った。食の乱れと器を使う乱れは同時に起こっていたと推察できる。おそらく、食育に関して一般に器に注目されるのに時間差があったのであろう。これが記事数の少なさのもうひとつの理由ではないか。

さて、地域ぐるみで食育と器をあわせて考える取り組み例はすでにある。例えば、実際

に器を作って食事をする試みが星野就久氏と風兎窯によって行われている^(注3)。松尾洋子氏も「子どもに本物の器を」という観点からの活動をかねて実施してきた^(注4)。真室川音頭で知られる山形県真室川町で開かれた「食育のつどい」(2008年1月)では、木工クラフト作家時松辰夫氏による「器の学校」の開催により伝統食と器の再発見が行われている。2006年には「食と器の文化祭」もこの地で催された^(注5)。地域の特色ある器は、その地の食材の生産・加工・消費それぞれにおける固有のスタイルを集約する最終局面でこれを口にする人の前に登場する。このため、その地の土地柄と人柄を融合するものに仕上がっていることが多い。いわゆる6次産業化という観点からみても、伝統的な器の製作は地域活性化の要の一つともなりうる。

このように、伝統食と伝統芸を守ることの大事さは、地域のなかで一定の範囲で認識され、各家庭において過去から今に至るまで連続と続けられてきたことであろう。日常のなかで器は生き、生かされて使われてきたのである。しかしながら、このようなことが文化祭のようなイベントとなる背景には、いわゆる「食の乱れ」が顕著になるにいたって、まず食そのものの乱れに注目が集まり、伝統食を守る運動となり、やがてそれが器にも及ぶようになってきた、という傾向があるものと推察される。食を大事にする日常が壊れ、従って器を大事にする日常も合わせて壊れたが、器の産地ではないところでは、まず前者が注目されたのであろう^(注6)。

2) 器に注目

器は日本においては縄文時代からすでに芸術的な域に達している（例えば岡本1999）。安土桃山時代には半島からの技術移転もあり優れた陶工と工房が地域の特色を生かして器を製造していた。その伝統を引き継ぐ地域と工芸産業も多い。濱田庄司・柳宗悦・河井寛次郎らによる民芸運動は、日本の日常で使われる器の高い芸術性を世界に広めた（熊倉他2005）。このような歴史ある器の重要性は社会ですでに十分認識されている。舩読本から和食・陶磁器の伝統も含めて膨大な記録と実践がある。いうまでもないが、良い器を使った食事はただそれだけで五感に訴え、それを踏まえた豊かな感性を育む。五感のうち、視覚・嗅覚・味覚の効用は言を俟たない。本節では、聴覚と触覚について若干付言する。

(1) 音

アルマイトの食器に注がれたスープを先割れスプーンでいただき、揚げてから長時間たって堅くなった鱈フライをつつく。昭和40年代の学校給食シーンでよく見られた光景である。その時どんな音がしただろうか。その音を当たり前と思って育つ子供は音に関してどのような感性を得るのだろうか。こうした指摘はここで繰り返すまでもなく以前からあった。現在では、その反省で、学校給食の一部では高強度磁器食器が使われたりするというように、改善が見られる。

もがり笛、手水鉢、水琴窟、思いつくだけでも、この国は繊細な音を大事にしてきた。絹の衣擦れの音に至っては、合繊でそれを再現するほどのこだわりを持っていたのである^(注7)。こうした音に関する感性が日常の

生活からはぐくまれてきたことには疑いがない。食事の際の食器は中でもわかりやすい一例だろう。陶器・磁器・漆器による食卓を思い起こせばよい。ただ食事のシーンひとつでも、音に奥行きのある意味を見出す感性の下地になる。

(2) 手触り

器に口をつけたときの感触はどうだろうか。例としてあげるのはややばかられるが、カップヌードルに代表される容器付き即席麺（カップ麺）として世界中に輸出されている商品がある。おやつや非常食として普及し重宝されている。震災のたびに被災地ではその携帯性・保存性・簡便性に高い評価が与えられる。そのために考案された当時の技術の結晶であり、いまでも新たなニーズの獲得のために内容を充実させる研究が継続されている。

しかし、ある程度の年齢の人は漆と陶磁器の器を用いた食事が日常だった。この世代のなかには、カップ麺の発泡スチロール製容器に口をつける際の感触が異様であったことを記憶している人もいるのではないか。カップ麺もアルマイトもそのメリットを否定しない。非常食としての機能ではむしろ優れている。しかし、それを日常とする場合に失われるものについて、再考されて良いと考える。唇の触覚の敏感さの程度が規定する生活の質は計り知れないのだから。

(3) 器の機能

口にもものを入れるときの心がけというものが日本の食卓にはあった。いのちをいただく、もちろんそうである。口から異界のものが入らないようにする、これももちろんであ

る。

いのちの持つ力には様々なものがあるが、人が食べるためにそれが断ち切られたことから来るストレスもある。こうしたものは、器で作られた力によって、あるいは器の持っている力によって浄化される。それが手作りの器の持つ効用であった。だから器によって異界の雑念を排し、口にしてもよいように、口から身体の中に入っても身体の中でその命を引き継ぐようにする。そもそも口紅を塗るのは、魔除けのためである。神社仏閣の塗装に数多く使われている朱は、この色がもともとその力を持っているからである。朱塗りの器が重宝されたのは、この力もまたその理由の一つであった。また、野菜類の緑を朱の器に盛りつければ、補色の組み合わせの美しさも生まれる。朱と緑の組み合わせはクリスマスカラーといわれるように、洋の東西を問わず聖域に用いられる。人の命の原初的な能力を喚起する効果を持っているのがその理由である。朱の器が尊ばれたのは、この機能もあつたのであろう。陶器では柿右衛門様式の朱と緑がその代表例のひとつである。制作された『たのしいうつわ』の作画でも朱と緑が多用されているのは偶然ではない。

こうしたこだわりをどのようなかたちで伝えられるであろうか。これが『たのしいうつわ』の大きな狙いのひとつであった。

3 制作者

1) 長井麦氏

食育に関する専門家や講学上の議論をする人たちは実に多い。本稿もまたその先行研究に多くを負っている。しかしここでは、食育

に関する「既存の権威」をあえて避け、地域のなかに溶け込んで器を作り食を育む人に制作を依頼した。麦工房の長井麦代表その人である。長井代表は、石川県に工房を持ち九谷焼発祥の地で九谷焼の伝統を学びながらも九谷焼の組合に属することなく多様な注文に応じつつ斬新な作風を展開するという自分の道を切り開いている。

もちろん、誤解の無いように急いで付け加えるが、長井代表に権威がないといっているのではない。長井代表には北陸各県や京都で数多くの個展を催した実績がすでにある。さらに、各所で陶芸教室を開催し、器の作り方とその意義の普及にいそしんでいる。こうして長井代表は、従来からある食育のメニューとは異なる日常のなかで食と器の制作・浸透を実践してきた。

既存のかなり定型的な構築された食育とそのプログラムの意義は否定しない。ただ、多くの専門家による議論がありながら、それを十分に汲むことのできなかった、そしてすでに乱れてしまった食卓の状況がある。これを踏まえ、より地域と生活に密着した、しかも敷居の低い実践的なアプローチが試されて良い。長井代表の作品はこの要素をすべて満たしている。

2) 経過：長井代表に辿り着く

(1) 絵本の案内書

乳幼児向け食育支援資材の検討にあたって、絵本の案内書を一定の範囲でサーベイした。この結果、絵本の解説の領域では、従来の教育的観点から見られた専門家による評価はもちろんあるものの、加えて、大人も子供

と一緒に楽しめる絵本とはどのようなものを、一般の読者の視点で訴えるものが強くなっている傾向があきらかとなった（たとえば金柿2007）。

現代は専門職受難の時代と言われる。絵本の評価に関するこの傾向は、この分野においても、同様に、教育と発達心理の専門家による指南にも素朴な疑問が呈されてきたことの表れと考えることができるかもしれない。

もっとも、読者の視点で書かれた絵本評価本の著者も、権威に挑戦するといった姿勢ではなく、どちらかという軽い気持ちで手に取って楽しめるものを推奨するという、「素人感覚」の索引作りといったことを目指している。

こうした事態は、いわゆる専門家の言うとおりにするのは難しいばかりか、専門家の言うとおりにしてうまくいかなかったのが今の日本社会であるといういささか短兵急な判断が出版界にあることが根底にあるのであろう。だからこそ、一般の買い手に近い素人的な視点から見た本が売れると出版されるのではないか。

（2）「食の乱れ」と「専門性の壁」

日本の家庭の食卓が崩壊しているという主張は、岩村2007等に詳しい。子供も大人も単に自分の好みで食事をとる、しかも子供はファーストフード、大人は取り寄せピザを、届けられた紙に包まれたまま一緒に食卓に並べて夕食にしたりと言った悲惨な状況が記されている。ただし本書では、乱れたケース群の指摘にとどまり、これがどれだけの世帯割合でみられるかという検証が欠けている。

その一方で、良識派は、食卓のちからで子

供の心は変わることを訴え続けてきた（室田1995・2009、本吉圓子2006など）。

若い世代の料理と食卓に関する姿勢は2極化している^{（注8）}。端的に言って、「やる人」と「やらない人」である。両者の割合は何とも言えない。「やる人」は、共稼ぎ世帯が多い。いわゆるキャラ弁などまるで宝石箱のようなお弁当を作って子供に持たせる。「やらない人」は、専業主婦が多い。比較的時間があるのであろう、いつでもできると思うとかえってやらないと推察される。経済的にも豊かな人たちである。

給食センターなど一定の程度の規模で運営されている食に関する公共施設では、年に複数回、弁当の日を設けている。学校・幼稚園では、子供が詰めてきた弁当を写真で一同に張り出すところもある。全般に、子供の詰めたお弁当は上手である。そのうえ家庭内で「やる人」のいる家の場合、その子供のお弁当は見事である。特に男の子がうまい。

このように良識派の主張を実践できる家庭がある一方で、全く崩壊している家庭もある。良識派の主張が全般的に通ったとは必ずしも言えない。なぜだろうか。たくさん理由があるうち、ここでは、わかりやすさを指摘したい。専門家の主張はもっともであるが、理解するのに努力が必要で、実践するのに忍耐力がいり、継続するのが大変という状況に至っているのではないか。今求められているのは、むしろ、わかりやすく、リラックスして新たな習慣を身につける手法であらう^{（注9）}。

おそらく、視覚に訴えることが多くの人々にとって有効なのである。したがって、この

乳幼児向け食育資材の検討でも、器と食に関する思いをおもしろおかしく視覚的に伝えることのできるものが有効ではないかと考えられる。麦工房で制作されているのは、器ばかりではない。麦工房のHP (<http://mugikoubou.iiyudana.net/>) を訪問すると、案内のために楽しいイラストが多数掲載されている。すなわち、長井代表は視覚的にもおもしろおかしく伝える能力を備えている人であった。

また、子供向けに食事の大切さを訴えるものは多いが、あわせて器の尊さを訴えるものは、実は少ない。

一部の食卓がこれだけ乱れてしまったのであれば、伝統を守り育てる主張に加えて、むしろ子供と一緒に大人も参加できる新しい領域で食と器の関係を考える意義はより重くなった。また、逆に伝統を守ろうという主張がより折り目正しい生活を強く要請するものと受け止められ、かえってとっつきにくさを生んでいる可能性もある。そうであるならば、それこそ若い女性も子供も一緒になって面白がられる器によるおもしろい食事のシーンが提案されてよい。幼稚園のお弁当のそれこそバラエティに富んだ成形容器の数々は、そのニーズを端的にあらわしているのではないか。

(3) 親しみやすい麦工房

ところでこれらのことは、乳幼児向け食育の支援素材の作成にあたって、いくつかのヒントを与えてくれる。そのひとつは、食育に関連して、この分野の既存の専門家によるアプローチとは異なったものであっても、より斬新な視点からの試みを肯定的に捉える余地が大いにあることを示唆している。

食事の楽しさと器の大切さを自然に心に染

みこませることができる、しかも容易に手にとってみることができる、そのために、絵の心と器の心、何より子供の心もよく知っている作者が求められる。こうしたことを訴えるには、単に絵の専門家である、絵本作家である、イラストレーターであるということよりも、常日頃子供にも講師として接しながら実際に器を制作している陶芸家ならばこそその迫力と真剣さを持って作れるのではないだろうか。

こうして、地域に密着しながら器と食の意義を追求する麦工房の長井代表に辿り着いた。麦工房は、陶芸家のアトリエであり、器の窯も備えている。ほとんど人の住まない地域に建築された能楽堂練習場に由来する家屋を居抜きでアトリエに使っている。制作のための静謐な環境であり、あくせくすることなく創作にいそしみ、夜には近隣の仲間や縁をつたってきた人たちが集い語らう場所となっている。麦工房の食料自給率は高い。味噌も自家製である。みな若い人たちなのに、多く作ったものは仲間達と相互に融通しあう、昔ながらの地域共同体の姿も一面では持っている。ここで作られる作品は、動物や植物を擬人化したものも多数ある。カバやカニで食器を作ったりもする。

麦工房の長井代表に依頼した理由のひとつは、食事において、器の大切さを伝える力を持っているからである。しかもそれを、近寄りやすい芸術ではなく、親しみやすい芸術・日常的に使える工芸品として展開している。教育的な配慮の円滑な浸透のためには、このような親しみやすさはすでに述べたように決定的に重要である。

また、先ほど指摘した料理に取り組む家庭の2極化の状況を踏まえると、「やる人」はほうっておいても良い。やらない人をどうするか。母親の行動パターンとしては、子供におねだりされてキャラ弁などに取り組む経路が顕著と考えられる。この観点からも、子供向けのこの種の楽しい教材は貴重ではないか。『たのしいうつわ』はまさにこの目的をもカバーできる内容を持っている。

4 制作の過程で

1) 「イラスト・写真集」の位置づけ

若い母親と子供に豊かな心をはぐくむための器と食卓のあり方をわかりやすく伝えるという構想は壮大なものであり、これを実現するにはきわめて時間がかかることから、試作品を作って評価することを麦工房から提案された。具体的には、器の写真とイラストをセットにした紙芝居のようなもの(3-4枚程度)をつくり、より大規模に世に問えるものかどうかをそれによって判断して欲しいと言うことである。その意味で、制作者はこの「イラスト・写真集」『たのしいうつわ』を、平面による試作品ととらえている。逆に言えば、今後の発展経過によって、「1 はじめに」で述べたとおり、様々な可能性にあふれ、時代のニーズに合わせて変化していく可塑性を持っている。

2) 内容

『たのしいうつわ』のメニューには、長井代表の提案により次の5つを盛り込んだ。5つのベースとなるものは、「人とのかかわり」を楽しく演出するきっかけとしての「器と食

事」・「楽しい食卓」である。

- (1) うつわ：どうやってつくるか。素材はなにか。土の産地はどこか。
 - (2) 麦工房の器とそれに載せる食材・料理
 - (3) 器の美しさともろさ。
 - (4) 楽しい器を使った食卓の楽しいシーン
 - (5) 陶芸家からのメッセージ
- いくつか補足する。

器とその制作過程(1)に関しては、(a)すべて土に帰ることのシンボリックなイメージとしての陶器を示す。それに載せる食物も命をいただくことそのもの。そうやっていただいた命の力で生き抜く人も、やがては死んで土に帰る。食物連鎖と命の連鎖。時の流れとともにやがては母なる大地に抱かれる。これを「すべてのものは自然からできている」ことで、そこはかたなく刷り込む。(b)さらに、器の創作過程で発揮されるエネルギーを明らかにする。モノ作りがどれほど人の手をかけているか、手作りのものの持つ力の源泉を伝えようとする。

麦工房の器(2)では、そもそも麦工房の作品は世界でたったひとつの器であり、それを使う「あなた」ももちろん、世界でたったひとつの存在を意識する。手作りの器は世界でたったひとつ。それを使う子供も世界でたった一人。たったひとつの存在を慈しむ過程に、親の愛情の深さを込める。

麦工房の器に載せる食材(2)に関しては、命をいただくことの意味と、すべては土に帰ることと併せて、おいしく食べることのありがたさの意味のふたつを演出する。

そして全体を通じて、「壊れやすい器=壊れやすい命」というメッセージを込める。特

に壊れやすい器だからこそこれを大事にする
と言うのも、乳幼児から伝え身につけるべき
ものであろう^(注10)。

3) 創作器のドラフト

長井代表は、2)の内容を実現するため、
新たな、面白くて豊かな形態の作品を創作し
た。次に、いくつかの創作器について、その
狙いをつかみやすくするために長井代表が描
いたイラストを掲げる(p.108,109 上中下)。

・クレープに見える器。これに野菜とおやつ
を載せる。器がまるで食べ物のような。食
間違ってかじらないように親は心配りする。
そう、食事の際の心配りは無限にある。楽し
いことにもそれを支える安全にも。その無限
は注ぎ込む愛情に限りないことにも呼応する
(p.108 上)。

・湖のような器。器の色は海の深い群青色で
ある。湖や海は命の源泉。これに魚を載せる
のはどうか。海と波を感じながら、生まれ故
郷からはるばるここまで来た来歴をイメージ
させる効果があろう。例えば、生命のたくま
しさと漁・流通にかかる人の手の労苦、そし
てフードマイレージである(p.108 中)。

・ままごとの復活。最近のままごとは、レト
ルトを並べて電子レンジでチン、というもの
がままある^(注11)。忙しい、もしくは料理を
しない親の日常の生活を反映したものであろ
う。しかしこれでは、煮焚きの習慣からはる
かに遠ざかる。まな板、包丁、火、といった、
手間をかけることを、週に一度でもいいから
親が実践すること、これを乳幼児も手触りあ
る形で理解することが必要であろう。そのた
めに、まな板に包丁をセットしたお皿はどう

か(p.108 下)。

・小さなうちから、刃物の便利さと怖さ、火
の力を感じる下地を作る。火は原始の炎の記
憶を喚起する。つながってくるものとこれを
切るものとのセットが新たな料理となりこれ
を口に入れて新たな命につながる(p.108 下)。

・お菓子の家ならぬ陶器の家。その中に子供
の顔の器があってもいい。ふたを開けてみた
くなるような、好奇心をそそるもの。中はき
っと楽しいよ、ホームは楽しいよ、という観
点から、陶器の家を作る(p.109 中)。

・子供の手のひらの器。鏡を見るように自分
の手と比べてみる。ダブルイメージ。すしカ
ウンターに座ったら、職人の手で握られたに
ぎりは手でつまむのがマナーのように、手に
注目する。自分の手が器になることを理解す
る。手の動きはまた、器用さと知性の代理変
数である。ゲームや携帯のような指先のみを
使うものではなく、小さい時から手と手のひ
らを使うことで、より豊かな感性が宿る可能
性を伝える。それは器の触感が育んできた感
性そのものである(p.109 下)。

5 「イラスト・写真集」『たのしいう つわ』のサイズ

冊子がどのようなものかを理解するには、
実際に手でもって見ていただき、使っていた
だくのが最も早い。本稿の後半に置いた。こ
の作品の前に、紋切り型の言葉は無力である。

本稿ではA4サイズのみを掲げたが、サイ
ズは3パターン用意してある。これも長井代
表とその協力者の提案による。紙芝居のよ
うに何人かで見るときのA4、親子が一緒に見
るときのA5、子供のサイズにしておもちゃのよう

に扱えるA6である。用途に応じて使い分けられるのではないかと考えている。

6 おわりに

1) 今後の課題

現段階では整理しきれていないものはいくつかある。

(1) 平面に由来するもの

3次元のものを2次元に表す難しさがある。具体的には、どんぶりに食べ物を入れても写真にすると平面のお皿に見える、しかもそのどんぶりは、実は半球体で、惑星という銘の入った器である。土星をその輪で水平に真っ二つに切って器にしたイメージである。せっかくそのコンセプトで作られた器がお皿に見えてしまう悲しさがある。

また、お魚の形態を模した器にお魚を載せて写真撮りしたが、魚ではなくナマズかムツゴロウの器に見える。すでにその器をよく知っている人にはわかって、初めて見る人にはその意図がどこまで伝わるかが疑問、ということがある。

さらに、制作過程における作り手の繊細かつ絶品と言ってよい軽妙な動きは、2次元の静止画ではおよそ伝わらない。平面による表現の限界であった。もっとも動きや瞬間をどう捉えるかはただそのためだけで技術と芸術の世界が独立して存在する奥深い分野である。

対応策として比較的検討しやすいのは、二つある。一つは3次元のイメージをこのイラストに埋め込むことである。例えばイラストの電子配信を考える。これは、現在の印刷技術では、イラストに用いられた色鉛筆の風合いの再現が難しいこともある。まだスキャナ

ーの方が現物の色に近い。従って電子配信の方がより原本の色彩に近い可能性がある。これを、ipadのような形態で表示し、子供に説明する際に、イラストの器の部分を手で触ると、その3次元の形態を動画で提供したり、作っているところの手の動きと土の変わり方を動画でわかるようにしたりというものである。

印刷代がかからないことや端末の数だけダウンロードできる形態にすれば、電子配信はただそれだけで普及のハードルを低くする。ネット時代の提供の媒体の一つとしてその有効性を高めるのではないかと考える。

もう一つは、「素人」の手作りの議論である。現段階では、通常の人々の参加意識を高める効能が、2次元の表現にあることを逆に活用したい。普通の妊婦や若い母親が、自分でもこんな器を用いてこんな料理を載せて子供と一緒に食べたいと思わせるようなそんなシーンを自ら作るようにするのである。そのために、イラストの写真は、印刷物であれば、第一には制作者マターの内容になるにしても、例えば『たのしいうつわ』のp.5・6の器と料理を掲げたシーンでは、作陶者がまず提案するモデルがある一方、その絵本としての活用者が自分のアイデアや器と料理を選べるようにするのである。「今日は誰それさんたちを集めてこんなふうにおもてなししながら一緒に楽しくご飯を食べるといいね」というシーンを自ら演出できるように、写真のスペースに様々なものを自ら選んで子供に説明できるようにする。一種の福笑いの要素を組み込むのである。その意味では、付録として、様々な器の写真と料理の写真がパーツと

して付加されている方がよい。また、この例を呼び水にして、好きな器の写真をとったり、工作をしたりというように自ら作り出す例もあるであろう。

(2) 触覚の美しさ

器の手触り感をどう伝えるか。手触りに似せた素材のコレクションを、付録のような形で付ける、一種の資料集がありうるか。もっとも、この『たのしいつわ』を見て実際に陶器による食事を促すものになれば十分にその目的を達する。『たのしいつわ』単体で閉じたものにする必要はないから、この課題は二義的なものであろう。

(3) 伝世の観念

器は使って自分の持ち物としていくものである。使われてはじめて器も生きる。すなわち、時間の観念を表現にどう入れるか。使い続けて自分の心を宿していく器とはどういうものか。そしてやがては「卒業」する器もあるだろう。それは自然なことである。そのとき、この器に詰まった幼いころの思い出は、器を手にとった手触りとともに子供の中にしみこんでいく。普段は意識されることはないが、その子の心身の形成の年輪のような一里塚となる。そしてその心に残った器は、ただ一点の焼き物であるがゆえに、その作り手と使い手の思いと思い出を載せて、縁ある人に受け継がれるだろう。例えば、その子供に、孫に、一族の幼い命に。

しかしこうしたことは、長持ちするものを実際に使うに勝るものはない。そもそもこの種の媒体で行う限界である。伝世品は多くの場合美術館で出会うほかない現代、むしろ読み聞かせる親の学びによる行動に期待する方

が建設的かもしれない。

2) むすび

以上、『たのしいつわ』の制作の狙いと背景・積み残された課題について述べた。内容に関連し、制作過程のいくつかのシーンにおける話題を掲げたが、もちろんそれがすべてではない。優れた作品は一人で歩き始める。それぞれの読者の感性で受け止めて欲しい。そして多くの人に意見を寄せていただきたい。読者ごとに意味づけのできる、明るく楽しい作品である。

「子供は明るいときに覚える、大人は哀しいときにいっぱい覚える」と言った人がいる^(注12)。『たのしいつわ』は、明るく楽しい色彩にあふれている。そして子供に明るい思いをさせて、込められたメッセージの自然な吸収を促そうとする。それは、丁寧に使っていれば汲めどもつきぬ喜びと楽しみを器と人が与えてくれるということであったり、使い方を誤れば割れてしまう器の価値を感じるためのものであったり、さらには、接ぐことのできないほど壊れるといった取り返しのつかないことが世にはある、ということでもあろう。こうしたことを、無条件の愛情を注いでくれるこの世の中で唯一の存在である母親から語り聞かされることで、子供はその暖かさにくるまれながら、器の力と光、命を載せるもの、命をつなぐものという意識と感性が心に培われていくのではないか^(注13)。

いずれにしても、楽しい作品を制作していただいたと心から思っている。見て楽しい。まずそこから、おもしろがって、作り手の心の通う器を手に取り、使ってみようかと言う

ところからはじまるのも良い。今回の『たのしいうつわ』がそのきっかけの一つとなることを信じている^(注14)。なによりも協同組織は人作りをその銘としこれを実践してきた。若い世代の雄飛のための種まきを怠ってはならない。

「物作りは今を越えなければ未来はない」(中室1997)。越え方にもいろいろな経路がある。必ずしも技術的な精緻化ばかりではない。世情を映し、従来なかった領域を切り開いていくのもまた物作りの新しい進化であろう。『たのしいうつわ』は、未来を信じる作者が次なる世代にあたたかい目を注いでいるからこそできた作品群・作画と考える。著者も、信じる明日をより確かなものにしたいという思いからこの仕事に取り組んだ。そして「今を越える物作り」のひとつが生まれたと受け止めている。

注

注1 本研究は、乳幼児向け食育のための絵本の作成という目的でスタートした。しかし絵本の世界には固有のカルチャーと膨大な蓄積がある。出版社によってはこれを作るのに3年かけて検討するところもあり、そのこだわりと配慮には瞠目すべきものがある。本稿で紹介する「イラスト・写真集」は、教育的な見地からの検討は多面的に行ったものの、このような我が国における絵本出版界固有の配慮を十分加えたものではない。著者は、この作品は絵本の原初的な形態という位置付けが可能と考えている。しかし作者である陶芸家長井代表は、「絵本」としての扱いにこだわっていない。「器の持つ食と人をはぐくむ力」を伝える活動に資するものであれば十分であるし、何より、知人の絵本作家が、ある頁のひとつの目の色をどうするかに3日も逆立ちしながら悩んでいるというように、その専門分野の人の制作姿勢を知っているからだろう。また、本研究は、目下の乱れた食の状況にかんがみ、できるだけ早く多くの人に使用してもらい意図がある。このため、絵本の固有のカルチャーを踏まえて時間をかけて発展させるのは、次のステップに譲ることとした。

注2

器と食育をキーワードとする新聞記事数の推移 (朝日新聞系)
(単位: 個)

検索ワード	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011 ^(注1)
焼 食器 食育	5	8	12	13	14	14	9
食器+食育	14	16	27	29	29	28	17
器+食育	76	109	117	153	143	109	67
食育	417	730	1,118	1,977	2,130	1,613	917
焼き物器	3 ^(注3)	2 ^(注4)	0	0	1	0	1 ^(注2)

*1 2011年は10月24日まで *2 ただし歴史記事
*3 2005年のふたつの記事を本文で紹介したが、もうひとつの記事は、子供用の本格和食器を取り扱う銀座の店舗「子夏」に関するもの。
*4 2006年の多治見の記事は、朝ご飯をテーマに制作された『ちゃんいっかのあさごはん』という絵本の紹介。

注3 http://www.d2.dion.ne.jp/~anagama/omake/syokuiku/syokuiku_top.htm 20111026

注4 <http://profile.amebajp/levere87/> 20111026

注5 <http://www.ruralnet.or.jp/syutyu/2008/200803.htm#m4> 20111026

注6 本研究の企画は2008年に検討された。この観点からの研究は、当時としては早いほうであったと考える。

注7 前田勝之助「私の履歴書」日本経済新聞2011年10月連載。なお、1931年、日本を訪れたシュンペーターは、「我々は芸術というものを我々から除外して考える。日本人は生活の隅々にまで芸術を生かしている」と語ったという。(日本経済新聞社編2007)

注8 以下、次の段落まで、伊達市給食センター職員など複数の系統外有識者からの聞き取り調査結果による。

注9 巨大組織もマーケティングではアニメなどを用いて親しみやすさを訴える。保険業でも、例えば第一生命は、史上最大の数の株主の誕生をつつがなく案内するために、HPやちらしで、易しい文章に加えて、イラストと漫画を使って手続きを解説するなど、多くの人々への着実な浸透のために分かりやすさを競う時代となっている。

注10 「陶磁器は壊れるから良いんです」とは、安部澄子日本女子大学客員教授の発言である。

注11 当研究所上田研究員の指摘

注12 ラジオパーソナリティ山谷新平氏の、末期の際の諺言である(山谷1991)。

注13 イラスト・写真集p. 8(本誌p.119)の台詞では、次のやりとりがあったことを付け加えておく。

○長井代表

……(イラスト・写真集p. 8(本誌p.119)のやりとり) かば君「こうやって見てみると、うつわってとっても大事なんだねえ。うつわが違っただけでごはんが美味しそうに見えるし、楽しくなるし……」

うつわ君「そうなんだよ。ぼく達は入れるものがあるって始めて生かされるんだ。おいしいごはんやたのしいごはんを食べるときには欠かせないものなんだヨ」

かば君「これからは、あのうつわでこれを食べよう〜とか、このごはんにはあのうつわを使おうって考えるようになったよ!」

うつわ君「うん! これからもずっとおいしく、たのしくごはんを食べたいこうネ!!」

(さいごに麦工房代表の長井麦登場)

麦「この麦工房では、
・手作りのあたたかさ
・自然のありがたさ

・人と人が関わって生きていくことの大切さを伝えたいと思い、うつわを作っています。」

うつわ君・かば君「ありがとう～。またね！」
.....

という感じなのですが、いかがでしょうか？
なにか、わざわざらしい感じも漂ってしまいませんか？

○小職

きわめてご多忙中のところ、このようなご高配を賜り、本当にありがとうございます。結びのやりとり、知恵を絞ってくださりありがとうございます。作り手ならではの心のこもったやりとりであるうえに、使い手の年齢も深く考慮した台詞と理解しています。偉そうなことをいって申し訳ありませんが、小生、うつわは魂を持ち、さらにほかの魂の容れ物となると理解しています。だからこそ命あるものを載せてその力を（食べる）人に送り届ける機能を発揮できるし、その繰り返してうつわ自身もまた力を宿して自分の魂を磨いていくものなのでしょう。使い手は自分の器にしていくプロセスも楽しめます。それは楽しい食事・おいしい食事に登場するたびに役者が回数を経るとともに上手くなっていくのと同じような味を出すものと思っています。楽しく使って自分のものにしていく喜びは、もちろん希なる骨董を引き継いで使うのもあるでしょうけれども、小生のような庶民感覚では、意識することのない日常の所作の積み重ねでこそ得られるものの方が実現し易いと考えています。長井様の作るうつわはとて親しみやすく暖かい。だからこそそれにふさわしい親しみやすく暖かいものがうみだされます。そして大事に使うのが普通になること、その普通の日々の継続が、何より貴重な心の財産になる、そう信じています。

また、私たちは選び選ばれて経験を積んでいきます。選ばれることは名誉です。選ばれないことは、待機です。万能のうつわ、万能の食材、万能の人は、通常はあり得ません。すべて平等ということもあり得ません。その時その時にふさわしいものを選ぶ力を積極的に作る、選ばれることの意味をうつわと食材の立場で考える、その習慣はそのまま本人の将来の選択にも確かな力となるでしょう。

いただいたやりとりは、いま申し上げたことをすべて含んでいます。普通の言葉で綴られた魂のやりとりだと受け止めています。ありがとうございます。

長井様の最後の登場では、制作に当たってのこころのありようもお知らせくださり、しみじみいたします。「つくる」精神を「使う」側は常日頃深く認識すべきです。「作り手」の手の暖かみを感じながら過ごすことが本当に難しい時代になりましたから。

「わざわざらしい」とおっしゃるけれど、歌舞伎も舞台も、聴衆の理解のために、わかりやすくする所作が必要です。ましてや妊婦や子供に理解してもらうのに、イラストの読み聞かせて「演じる」ことも有効です。

本当にありがとうございます。ご提案の通りで作成していただければ幸いです。よろしくお願ひ申し上げます。

(了)

注14 『たのしいうつわ』を読み聞かせてみて当研究所に寄せられた所感（p.121のアンケート表）の一部を紹介する。

- ・たのしく読みました。
- ・きちんと絵本の形にしてみたい。
- ・見ているだけでうれしく楽しくなります。
- ・子どもにわかりやすく、絵本感覚で学べてとてもよいです。
- ・作者の人物がにじみ出た、あたたかさが伝わる内容でした。
- ・作者の絵は上手！初めて料理が盛りつけてある麦ちゃんの器

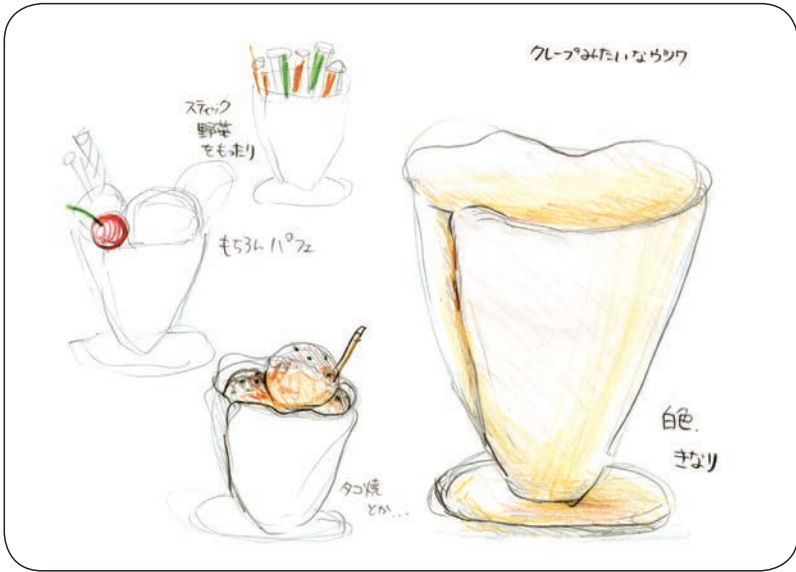
をいっぱいみて、かわいい、おいしそうって思いました。

- ・とてもかわいくてわくわくします。
- ・素朴で楽しい手作り感がとてもよかったです。
- ・カバさんがすごくcuteです。いやされマス。
- ・一つ一つが愛情もっていて、良かった。とてもかわいいです。
- ・子ども向けの子どもの大好きなご飯の写真があればよりよいと思った。
- ・とても楽しい作品ばかりでした。
- ・読むのがとても楽しい冊子で、小さな子でも読みやすいと思った。
- ・イラストが温かくて良い。
- ・夢があってとてもユニークでよかったです。
- ・とても楽しくなる作品ばかりで目で見ても癒され使いながらほっこりできました。
- ・うつわに丸みがあって、手ざわりがやわらかく温かい、ぬくもりを感じるからいいね。若い人はもちろん年令の高い人も使って楽しくなりますね。生活が豊かになって嬉しいね。頑張ってください。
- ・見やすく、楽しくなる内容
- ・あたたかみのある素敵な作品ばかりで感動しました。大事に使います。
- ・食事の観点が刺激されて良い。
- ・見るだけでとても楽しかったです。
- ・食器は楽しいなごみの食卓に大切ですね。最近その思いが大きくなりました。
- ・とうき・じきの大字etc...漢字にルビが必要なページがあるかも...（小学校高学年でも）
- ・楽しく食事ができるような気がして素敵だと思いました。
- ・器で気分も楽しくなるものですね。イラストや写真も楽しいものばかりでよいですね。お料理が上手でない分、器を上手に使えたらいいなと思いました。続きがあれば見たいです。他のお家にも見せたいと思います。
- ・見ていてすごく楽しいし、色づかいがとてもキレイでよかったです。

○農産物でも顔の見える野菜づくりが直売所などでは一般的となった。本稿で作り手を表示したのは、だれが作ったのか、その作り手の手のぬくもりを感じることに、これが目的である。そのために工房の固有名詞を明記している。誤解のないようにしていただきたい。

引用文献

- ・岩村暢子2007『変わる家族 変わる食卓－真実に破壊されるマーケティング常識－』勁草書房
- ・熊倉功夫・吉田憲司編2005『柳宗悦と民藝運動』思文閣出版
- ・金柿秀幸2007『大人のための絵本ガイド 心を震わす感動の絵本60』ソフトバンク新書
- ・室田洋子1995『心を育てる食卓－食卓の家族論』芽ばえ社
- ・室田洋子2009『「食卓の力」で子どもが変わった！－いっしょに食べて心を育てる』カンゼン
- ・本吉圓子2006『あふれるまで愛をそそぐ6歳までの子育て－子どもの心にひびく愛ひびかない愛』カンゼン
- ・中室勝郎1997『漆の里・輪島』平凡社
- ・日本経済新聞社編2007『経済学 名著と現代』日本経済新聞出版
- ・岡本太郎1999『神秘日本』みすず書房
- ・山谷えり子1991『人生について父から学んだ大切なこと』PHP研究所

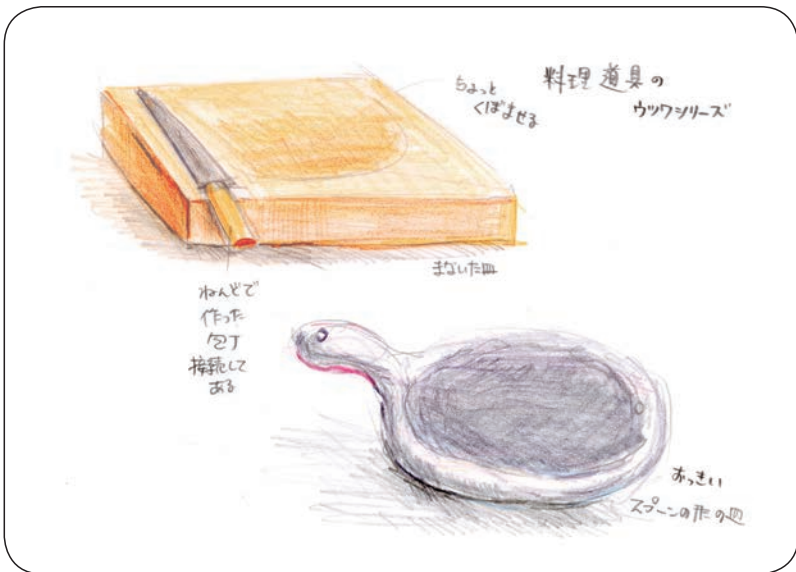


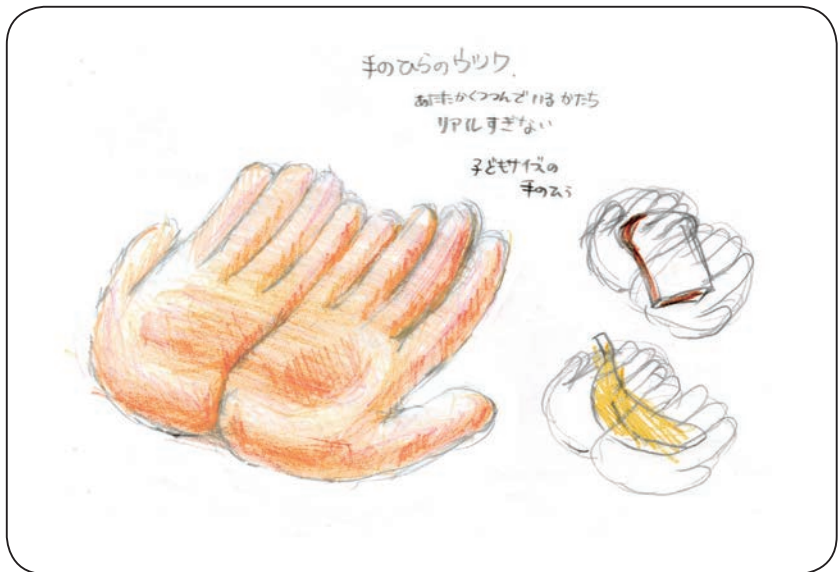
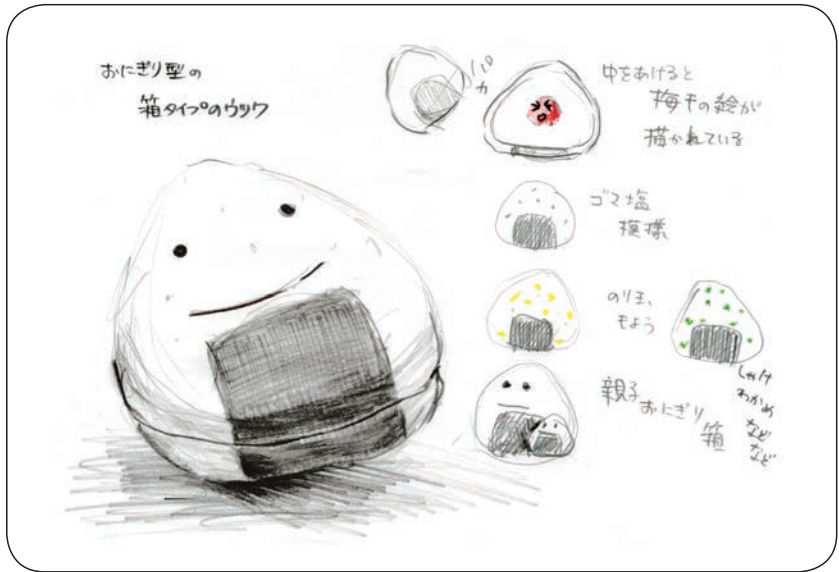
* 『たのしいつわ』に登場

- ・ p. 4 ⑥
- ・ p. 5 中央右
- ・ p. 7 中央右

* 『たのしいつわ』に登場

・ p. 5 左上





(メモ)





うつわの種類は

磁器

おもに
2

ぼくは石からできてるよ
うすくて白いものが多いよ

? やきものって
どんな性質?

良いところ!
丈夫、耐水性が
ある、耐熱性もある

あいたた...
苦手なところ!
強い衝撃に弱い
火おもたいなあ

てるよ
しいよ♪

達紹介!

あら どうも~ うす はろ~ おいしい料理が大好き やあ よろしく

カップ ちゃわん コップ どんぶり おさら 鉢 花器 酒器

あ ふうあ

ぼくたちの国日本ではこの
やきものの材料が各地で
とれるんだヨ
.....九州の有田焼
の清水焼
の瀬戸焼
の壺屋焼 などなど.....



いろいろあるんだねえ
ちなみにうつわくんは
どこ出身なの~?

ぼくは石川県の九谷
から出来たよ。
やきもの見に行く旅に行きたい
なあ

やきものができるまで



ぼくが生まれ
石川県にあ
を紹介しまーす。

① 粘土をねる



手でこねるのは
大変だあ〜



手で作ったリ
ロクロで
作ったリ...

麦工房へようこそ！
こんにちわ〜！ここは、
いる工房です。日々、い
いるんです。ひとつひとつ
ない。世界にたったひとつ
そんな麦工房の作業工
少いだけお見せし

② 成形する



なかなか
難しい
なあ



③ 乾燥させる



ピカ〜

どんどん
かわくぞ〜

④ 素焼 (750℃~900℃)

まだまだ
続くよ〜



土の色が
ちょっと
変わるよ
がんばりぞ
あ〜



たところ
るやきものの工房「焼工房」

「うつわ」「かま」を作
いるな開のうつわが生まれて
手作りど、同じものが全く
のうつわを作っています。
程や作業風景を
す~。

5 絵付け



けこう
きんちようする
作業だね



6 ゆうがけ



7 本焼 (1240℃ ~ 1280℃)



陶器と
磁器で
焼く温度が
ちがうんだヨ



8 完成で〜す!



けこう
大変
なんだにやあ

やきものの作業工程は産地やものによて異なります~。

麦工場のうっわとおいしいごはん達



海皿



これは
たのしいねえ

いいなあ〜



ウツワムシ

いろんな
うっわが
あるね



そうだね



クレープカップ



ピアノコーヒーセット

うっわくん
おなかすいたねえ

うわあ
おいしいぞうだ!



イチゴのショートケーキ皿



そう

おいしいごはん
には
お気に入りの
うつわを使おうと



魚ちゃん皿



ごはん
ですあ〜



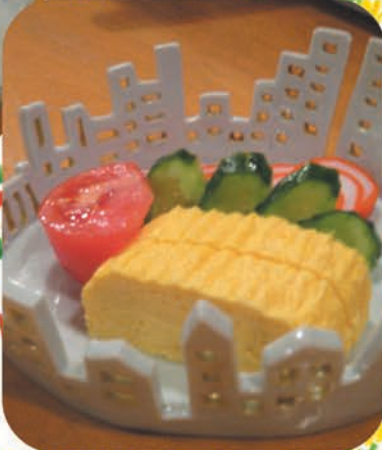
ウロコ皿



これなら
このうつわにも
合うねえ



ピアノ皿



まちなみ皿

ごねえ

食べたいにや









こうやってみると、うっわってとっても大事なんだねえ
うっわが違うだけでごはんがおいそうに見えるし。
楽しい食卓になるし.....

そうなんだよ。ぼく達は入れるものがある
はじめて生かされるんだ。 おいしいごはんや楽しい
ごはんを食べる時には欠かせないものなんだよ。



うん! これからは、あのうっわ  でこれを
食べよう〜とか、このごはんにはあのうっわ 
を使おう〜って考えるようになったよ!

これからもずっと
おいしく楽しむごはんを食べていこうネ!!



この麦工房では ・手作りのあたたかさ
・自然のありがたさ
・人と人が関わって生きていくことの大切さ
を伝えたいと思い、心を込めてうっわを作っています



たのしかったねえ



また
 やりたい
 にゃあ

ありがとうございました



またね

2011. 麦

8

『たのしいうつわ』(2011年7月)

○構成・作陶・作画・写真 麦工房代表 長井麦

○協力 長井麦氏を囲む加賀温泉郷の皆さん

○問合せ先

渡辺靖仁(農協共済総合研究所)

jwjy895@yahoo.co.jp

Fax : 03-3262-9667

〒102-0093

東京都千代田区平河町2-7-9

JA共済ビル5階

農協共済総合研究所 調査研究部

Fax : 03 - 3262 - 9667

よろしければ、『たのしいうつわ』を読み聞かせてみたご感想をファクスにてお知らせください。

『たのしいうつわ』 ご意見欄

- 1 大・中・小のサイズについて（該当するものに 丸印）
どれが一番使いやすかったでしょうか（大 中 小）
- 2 読み聞かせてみていかがでしょうか？（該当するものに 丸印）
（楽しい おもしろい 子どもがよく見た 自分も器を大事にしようと思った）
- 3 ご感想
お気づきの点がありましたら、ご指摘ください。

- 4 差し支えなければ、ご家族の情報をいただけますか
あなたの年齢（ 才） 性別（男 女）
お子様の年齢（ 才） 性別（男 女）（ 才） 性別（男 女）

○問合せ先

農協共済総合研究所 渡辺靖仁

jwjy895@yahoo.co.jp

Fax : 03 - 3262 - 9667

〒102 - 0093

東京都千代田区平河町 2 - 7 - 9

J A 共済ビル 5 階

農協共済総合研究所 調査研究部